

一粒の麦は地に落ちて

——トマス・クランマーの殉教

ヨハネ 12 : 20 - 33



司祭 ヨハネ 井田 泉

2021年3月21日

大齋節第5主日

聖アグネス教会にて

「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。
だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」ヨハネ 12:24

主イエスは弟子たちとの別れが迫ったとき、ご自分のことをこのように言われました。このイエスに引き寄せられて、一粒の麦となって死んだ一人のことを、今日はお話しします。それは16世紀、今からおよそ500年前に、聖公会というわたしたちの教会の土台を築いたトマス・克蘭マーという人です。

祈祷書の12頁を開いてみると、教会暦の小祝日が記されています。その中に

「3月21日 主教トマス・克蘭マー（1556年カンタベリー）」と書いてあります。今日3月21日は、トマス・克蘭マーの殉教の記念日です。彼は、16世紀、第69代カンタベリー大主教として英国（イングランド）の宗教改革を推進しました。克蘭マーの働きと死があって、聖公会の信仰と礼拝は基礎を据えられ、そうしてわたしたちのところまで受け継がれてきました。

トマス・克蘭マーの目に見える最も大きな働き——それは祈祷書を編集し、発行したことです（1549、1552）。それまでの礼拝はずっとラテン語で行われており、一般の人には何が語られ祈られているのか理解することができませんでし

た。礼拝は、参加者それぞれが自分のわかる言葉で、まごころからささげてこそ礼拝です。彼が編集した英語の祈禱書によって、一部の聖職者だけではなく、一般の信徒が身近に祈りの書を用いて信仰生活を深めて行けるようになりました。国王ヘンリー8世の後を継いだエドワード6世の時代です。

クランマーが書いた「祈禱書への序文」(1549)には、このように記されています。

「このイングランドの教会では、長年、礼拝がラテン語で読まれてきた。そのため会衆は理解できない。ただ耳で聞くだけで、彼らの心も霊も精神も、それによって教えられ養われることがなかった。」

礼拝を、会衆皆がわかるものにしなければならない。聞いて理解して、わたしたちの心と霊と精神が慰められ、養われて、愛に燃えるものとなるべきだ、とクランマーは考えました。そのために用意されたのが祈禱書なのです。

祈禱書にはたくさんの聖書の言葉が含まれています。これはクランマーの願いでした。祈禱書によって聖書の言葉に触れてほしい、聖書は生命の言葉なのだから。彼は聖書日課を定めて、皆が聖書にできるだけ触れていけるように工夫しました。

たとえば 150 ある詩編全体を毎月 1 回唱えられるように、毎

日の朝夕に割り振りました。今から 40 数年前、わたしが神学生だった頃、神学校では朝夕の礼拝をとおして、たしかにひと月で詩編全体を唱えるようになっていました。忠実に実行すれば、1 年間に 12 回、詩編全体を読むことになります。

ところが、祈祷書が発行されてまもない 1553 年、国王エドワードが亡くなり、メアリーが即位しました。メアリーは宗教改革を憎み、改革路線を否定して教会のカトリック復帰を進め、改革を進めた者たちを迫害しました。宗教改革の中心的指導者であったクランマー大主教は聖職位を剥奪され (Degradation)、彼が進めた改革路線が誤りであったことを認めるように迫られました。彼は脅迫に屈して、自分がこれまで進めてきたことが誤りであったとする転向声明文を書いて署名しました。しかしそれでも彼は赦されず、火刑に処せられることが決定されました。

クランマーが死刑となる前の日、彼は召し使いの少女こう頼んだそうです。

「わたしのために祈ってほしい。悪い司祭の祈りよりも、善き信徒の祈りのほうが価値が大きいとわたしは思う」。

メアリーが即位して 3 年後の 1556 年 3 月 21 日、今から 465

年前の今日、衆人環視の中で彼を火刑にする儀式が行われました。クランマーの大罪を弾劾する説教が行われました。そしてクランマーは自分の重い罪を認め、刑に服する言葉を述べるはずでした。ところが、彼は突然予定されていなかったことを語り始めたのです。

「自分は死の恐怖のために、自分の良心に反して転向声明文を書いたのだ」。

怒号と興奮の中で彼は語りつづけました。彼は鎖で柱に縛り付けられ、火が付けられました。彼は燃える火の真ん中に自分の右手を突っ込んで言いました。



「恥ずべき右手、この手が罪を犯した」

自分の良心を偽ってカトリック転向に署名したその手。その手が自分の不真実そのものを示していたのです。

そして最後は、あの最初の殉教者ステパノと同じように、「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」（使徒言行録

7：59) と祈り、「天が開いて、人の子が神の右に立っておられるのが見える」(7：56) と言いつつ、死んでいったといわれます。

このトマス・克蘭マーの祈りと働きと殉教の死があって、聖公会という教会が形成され、今日のわたしたちに至ったのです。ヘンリー8世の名前は忘れてもよい。しかしトマス・克蘭マーの名は、わたしたちの心に刻まなくてはなりません。

わたしたちの祈禱書は、克蘭マーの祈禱書が元になり、改訂が重ねられて作られたものです。祈禱書には、だれもがよく祈り、神を知り、信仰を深めることができるようにと願った克蘭マーの切なる願いがこめられています。祈禱書を用いて自分の信仰の養いとすること、そして一緒に礼拝することを大切にしたいと願います。

克蘭マーは信念を貫徹した殉教者というのではなく、恐れ、迷い、転向を誓うなど、人としての弱さを持った人間でした。けれどもその弱さの中に神が働かれました。彼が死ぬるとき、イエスは彼をご自分のもとに引き寄せられました。そのゆえに彼の良心はうずいて、真実を叫んで死んでいきました。

それから時を経て、やがて世界に広がる聖公会の母体、英国教会が成立するのです。

「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。
だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」ヨハネ 12:24

わたしたちも弱く、過ちを重ねるかもしれません。けれども良心の痛む者でありたいと思います。しかしわたしたちの弱さの中に、神が働いてくださいますように。そしてほんとうに大切なときに、はっきりと信仰を表わすことができますように。